| 氏　　名 | 好川　聡（よしかわ　さとし） |
|---|---|

（論文内容の要旨）

中唐元和期に見られる顕著な現象の一つに、その当時を代表する文人たちが南方に左遷された際に、こぞってその地独特の風土や風俗を詩に書き表している点が挙げられる。この時期、韓愈は連州陽山県と潮州、柳宗元は永州と柳州、劉禹錫は朗州と連州、白居易は江州と忠州、そして元稹は江陵と通州というように、いずれも長江以南に複数回左遷された経験を持つ。その地域は湖南から広東、四川など広範囲に及んでいるが、彼らはその左遷地を「居蠻夷之地、與魑魅爲羣」（韓愈「潮州刺史謝上表」、於潮州）、「居蠻夷中久、慣習炎毒」（柳宗元「與蕭翰林俛書」、於永州）、「昔游秦雍間、今落巴蠻中」（白居易「我身」詩、於忠州）や「昨來竄荊蠻、分與平生　」（元稹「酬別致用」詩、於江陵）などと表現して、異域の地に左遷された不遇を嘆いている。本稿では便宜上、以上のように表現された地域を総称して「蛮夷」と呼ぶ。もちろん、「蛮夷」という言葉が持つ概念を明確に定義することはできないが、詩人が中原とは異なる南方独特の風土や異民族の風俗に接したときに、嫌悪を伴う違和感を感じた地域とひとまず定義しておく。このように「蛮夷」とは本来差別的な意味合いを含んだ表現であるが、当時における認識をよく表すものであり、本稿では敢えてこの語彙を用いる。結局のところ、その地を蛮夷と感じていたどうかは、その地を描写した詩文から判断するより他ないが、冒頭に列挙した左遷地は概ね蛮夷の地と見なされていたと考えてよい。こうした蛮夷の土地に左遷された彼らの詩は、蛮夷の自然や風俗を嫌悪して拒絶したり、その土地の産業や文化に興味を注いだりと、様々な文学の個性を開花させている。だが、先程仮に定義した「蛮夷」の概念からすれば、後者の好奇心から異民族の文化に興味が注がれた表現は「蛮夷」の範疇から外れてしまうことになる。何故なら、言葉も通じず文化も感じられない嫌悪感を催す地域に対して、そこに住まう異民族の風俗の価値を認めたとき、それはもはや「蛮夷」ではなく「異文化」という認識へ昇華されるからである。その境目を明確に線引きすることなどできないが、個々の作品の中でど

う表現しているかを一つ一つ丁寧に検討していくことを通じて、その認識が徐々に変化していく過程を明らかにすることが本論の大きな目的である。

〇第一章「蛮夷の光景　―中唐の異文化受容史―」

中唐を代表する文人達―韓愈、柳宗元、劉禹錫、白居易、元稹―は、みな左遷された地独特の気候、生態、風俗などを事細かに描写しているが、こうした蛮夷独特の自然や風俗は、中唐以前は中原と異なる異質なものとしてほとんど無視されていた。だが中唐になると、陽山に左遷された韓愈を最初として、各文人たちは過去から現在に至る自己の境遇を綴った長編回想詩というジャンルを駆使して、積極的にその風土風俗を描写していくようになる。

また、その叙景と叙情も各々の文人で異なっている。大まかに言えば、韓愈と柳宗元は蛮夷の自然や風俗を嫌悪して拒絶しているが、劉禹錫、白居易、元稹は嫌悪感より好奇心が上回っており、気候や風土のみならず、その土地の産業や文化にも興味が注がれている。これらの作品を時代順に並べてみると、貞元末の韓愈の作品から元和後期の白居易や元稹の作品へと、蛮夷への嫌悪感が次第に薄らぎ、好奇心が上回っていく傾向があることが窺える。また個々の文人にも、例えば元稹は江陵にいた時の詩より、通州で作られた長編回想詩の方が嫌悪感が薄らいでいる。左遷された時の詩はその悲哀を詠うのが従来の型であったが、中原と異なる蛮夷独特の自然や風俗にも価値を認めてその面白さを描写することは、新しい抒情の型であり、左遷という中原から疎外された中での自己の価値を再認識することにも繋がっていく。こうした蛮夷への認識の変化は、左遷された文人達がその悲哀から乗り越えていこうとする際に、大きな役割を果たしており、それは宋代の文学に継承されていく。

〇第二章「韓愈の長編回想詩をめぐって　―杜甫との比較から―」

前章で取り上げた過去から現在に至る自らの境遇を綴った長編回想詩というジャンルは、杜甫にその源流を求めることができる。杜甫は時事を含めて半生を回顧した「北征」や、晩年に自らの人生を総括した自伝的な「壯遊」などの五言古詩を作っており、中唐の文人達はこれらの作品群の影響を強く受けて長編回想詩を制作して

いる。本稿では、最も早い時期に回想詩を作っている韓愈に焦点をあてる。まず、「此日足可惜一首贈張籍」では、主に　州の乱に翻弄された体験を中心に回顧しているが、家族のもとへと向かうその道中と再会後の様子を中心に記した基本的な結構など杜甫の「北征」と共通する要素が多い。しかしながら、「北征」の抒情性が悲哀を主としているのに対して、韓愈の詩では　州の乱という苦難を乗り切って、家族や張籍と無事に再会を果たし得たその喜びを詠うことに主眼が置かれている。

　州の乱で体験した過去のつらい思い出を回想というプロセスを経ることによって、面白い体験をしたと張籍に語っているのである。次に、陽山に左遷された際に作られた「縣齋有懷」は杜甫の「壮遊」に倣ったものといえ、自信に満ち溢れた少年が何も成し得ぬまま年老いていく過程を描くなど同じ構造を持っている。だが、韓愈の詩では自分が成功しないのを周囲の環境のせいにして自己の正しさを主張したり、自己の異質さを強調するなど杜甫にはない要素がある。衆多とは異なる自己の正しさを主張するのは中国の士大夫の伝統的な有り様であるが、江陵へ赴任する道中に作られた「赴江陵途中…」の中では、陽山左遷への憤懣のあまりに同僚の柳宗元や劉禹錫に疑惑の眼差しを向けたり、隠逸を願いながら仕官の斡旋で詩を結ぶなど、従来の規範から外れた自分の素直な心の有り様をそのまま詩に書き込んでいる。つまり、杜甫の回想詩が青年の強い志や自負心が時代の波に翻弄されていく中で、空しく老いていき失われていく内面の変化を描くことに主眼があるとすれば、韓愈の回想詩は、他人の誹謗中傷によって左遷の憂き目にあっても、それに流されず納得せず自己の正しさをしつこく主張するような、変わり得ぬ自己の内面を描くことに主眼があり、「赴江陵途中…」のように悲哀の枠組みに収まりきれない要素を多分に含んでいる。また、長安に召還された際に作られた「答張徹」では、陽山に左遷されていた時の様子が回想されている。陽山に左遷された当時は、その自然や風俗に対して嫌悪感しか示さなかったが、この詩ではそうした山水を楽しんだと回想されている。以前は嫌悪感しか催さなかった存在が回想というプロセスを経ることによって、楽しかった思い出として昇華されていることは、その後の韓愈の文学創作に大きな役割を果たしていく。

〇第三章「柳宗元の柳州詩」

柳宗元は中唐を代表する文人であり、過去の研究は膨大な量に及ぶが、その多くが彼の悲劇的な生涯に強く惹かれるためか、論の焦点が柳宗元の精神の掘り下げを主としている。一方で、その詩の文学性―何をどのように表現する面白さがあるのか―という点に関しては言及されることは少ない。本章は、柳宗元の蛮夷の風景を詠じた詩を取り扱い、その文学表現の特徴を他の中唐の詩と比較しつつ論じたものである。

柳宗元が最初に左遷された永州は、一般には「永州八記」や山水詩など美しい風景を描いたものが有名であるが、実際には彼の書簡文の中で述べられているように、劣悪な環境にある蛮夷の地であり、長編回想詩の中でも蛮夷の風土風物を羅列した詩句が例外的に見受けられる。それが柳州へ再度左遷された際には一変して蛮夷を主題とした詩を積極的に描くようになる。積極的といっても蛮夷に嫌悪感を催している点は永州での蛮夷描写の詩句と変わらないが、大きく異なるのは例えば「山が剣先のようだ」や「雲が墨のようだ」のような平易な言葉を用いた比喩が見られるところにある。これまでの蛮夷描写では見たこともない様子を既存の典故や難しい言葉で羅列していくものが多かったが、この比喩というのは平易な、日常的な言葉に置き換えており、韓愈の「南山詩」の比喩に通じるところがある。つまり、既存の概念や語彙に頼っていたのが自らの感覚で新たに捉え直されている。こうした精神は中唐という時代に共通して見られる現象であり、蛮夷と正面から向き合い自分の目で認識を深めようとする態度が、「種柳戲題」詩のような蛮夷と向き合いながらも、蛮夷の民に対する拒絶感が感じられない詩も作られるようになることへと繋がっていく。

〇第四章「元稹の異文化認識　―白居易との応酬を中心に―」

元稹が蛮夷を題材とした詩は多岐にわたっているが、これまでその独自性に着目した研究はなされてこなかった。元稹の南方異域描写は江陵に左遷された元和五年に、杜甫の一百韻詩の影響を強く受けて作られた「酬翰林白學士代書一百韻」より始まるが、その表現は蛮夷の土地に対する拒絶感が強く表れている。ただ、その後

に江陵で作られた「賽神」「競舟」「茅舎」は、土着の民衆の文化性が欠けていることを諷諭的に描いているが、そこに描き出される民衆の姿はバイタリティに溢れている。その為、これらの詩には悲哀が感じられず、中原とは異なる価値観を持ってたくましく生きていく土着の民衆の姿に元稹が気付いたことは、その後の蛮夷描写が変化していくきっかけとなっていく。

そして元稹が元和十年に通州に左遷させられてから、白居易との応酬を通じた異域描写が始められる。白居易の「得微之到官後書備知通州之事悵然有感因成四章」に答えた元稹の「酬樂天得微之詩知通州事因成四首」、白居易の「東南行一百韻」に答えた元稹の「酬樂天東南行詩一百韻」、元稹の「送崔侍御之嶺南二十韻并序」に擬した白居易の「送客春遊嶺南二十韻」、それにさらに応酬した元稹の「和樂天送客遊嶺南二十韻」と、競い合うように応酬しあうことによって、お互いの表現が磨かれていった。特に最後の元稹の嶺南を描いた詩は自注が本文より多く、嶺南の異文化という従来にない面にまで踏みこんだ描写が数多く見られる。また、通州でのより注目すべき認識の変化は、元稹が江陵と通州、嶺南それぞれの風土風俗を意識的に区別して描き分けていることにある。自注でわざわざ書き添える程意識的に複数の左遷地の個性を同時に描いた文人は元稹以外にはいない。元稹は蛮夷の個性という観点からさらに一歩踏みこんで、その異文化を認め始めただけでなく、各地域の個性をも認識し始めている。

また、同じく通州で作られた「蟲豸（ちゅうち）詩七首」は人々にとって害を為す蛮夷の動物一つ一つに注目し、人々が被害に遭わぬようわざわざ二十一章もの詩にして細微に描いた特異な詩である。こうした詩が作られるに至った土壌には、これまで明らかにした蛮夷の風土風俗に異文化を認めていった認識の変化と、その各々の地域の個性を描き分けようとする意識の変化があった。もともと蛮夷描写というのは、左遷された悲哀や不遇を強調するために詩中に添えられたものであったが、元稹はこれまで見てきたように蛮夷を扱いながらも悲哀を感じさせない詩を作り出していった事に大きな意味があるのである。

〇第五章「劉禹錫の民俗文学」

韓愈や柳宗元、元稹が左遷当初は蛮夷に嫌悪を示しながら、程度の差こそあれ徐々に異域の風土風俗に融和していったのに対して、劉禹錫は最初から朗州の風土風俗に対する嫌悪感や拒絶感を持ち合わせていないところに、その認識の大きな特徴がある。「蛮」という語彙で左遷された地を蔑視したり、異なる言語を話す民衆に嫌悪感を示した表現を用いたりしないのである。その自然を描いた詩でも、「沓潮歌」という高潮の様子を描いた楽府では、後に編まれた『嶺表録異』では人々に甚大な被害を及ぼすその恐ろしさに重点が置かれて記述されているのに対して、劉禹錫はただ大自然の驚異に感嘆するかのごとき口調で沓潮が表現されている。

また、他の文人たちと異なり、楽府という詩体を用いて南方独特の風俗を題材とした詩を詠っていったが、「采菱行」「插田歌」「　田作」という民衆の生活に焦点を当てた点に独自性がある。元稹も「賽神」「競舟」と民衆の生活を描いた詩が見られるが、これらは祭りという特別な儀式を描いたものである。一方、劉禹錫は農作業という普通は気にもとめない日常そのものを描いており、その内容も新奇さは感じられない。それは蛮夷の珍しく奇怪な風物を描くという他の中唐文人たちの観点から外れている。民族や地域が異なりながらも、そこには中原の人々と変わらぬ生活感があることに劉禹錫は価値を見出しており、元稹の描いた嶺南のような、中原には無い風物が立ち並ぶ異文化とは方向性が異なっている。このような認識が、民間の歌謡を取材しようとする動機に繋がり、蛮夷らしさを全く感じさせない「竹枝詞」が作られていくことになる。

〇参考論文「元結の叙景と叙情」

元結の文学は杜甫がそうであるように、同時代の盛唐や大暦の詩人達とは大きく異なった特徴を持っており、中唐元和期の文学に先駆ける要素を様々に内包している。叙景の面でいえば、彼の詩句には所謂佳句や一点を凝視するような鋭い句は見られないものの、それらがないからこそ発揮できる落ち着いた静かな空間が描かれた詩が多く見られる。さらに近体詩も作っておらず、こうした特徴は彼が意図的に盛唐的な詩風から脱しようとしていたことが窺われる。また、叙情の面でいえば、元結は道州刺史という南方の蛮夷の地に左遷されているが、その詩作は自然ととも

にある喜びを詠う詩ばかりであり、悲哀に沈むような詩は見あたらない。このように盛唐の詩風からは大きく逸脱しており、後の白居易が「序洛詩」の中で標榜した「苦詞は一字も無く、憂歎は一声も無し」という精神に先駆けるものといえる。

| 氏　　名 | 好川（よしかわ）　聡（さとし） |
|---|---|

（論文審査の結果の要旨）

唐代の文学が中唐に至って大きな変化を生じたことは、近年ことに日本において活発な研究が展開し、文学の様々な面における変貌が明らかにされてきた。本論はその時期の文学における「蛮夷」の描き方に着目し、従来とは異なる認識が生まれ、且つ中唐文人のなかにも発展的ともいうべき差異があることを明晰に論じたものである。異域の捉え方の変化はこれまでに指摘がなかったわけではないが、具体的に作品を通した論述は本論が最初のものであり、中唐文学研究に新たな知見を加えたということができる。

南方の地に左遷された文人たちが、中原とは異なる風土、人気（じんき）に違和感や嫌悪感を抱く、その対象を彼らは「蛮夷」という言葉で表しているが、中唐文人が「蛮夷」をどのように表現しているか、中唐を代表する五人、韓愈、柳宗元、元稹、白居易、劉禹錫、それぞれの作品の読解を通して論者は追跡する。それ以前にも南方流謫はもちろんあったが、その地の人々や生活の様子が詩に描き出されることはほとんどなかった。都から僻遠の地に流されたことを恨み悲しむことに終始して、まわりの現実は目に入らなかった、あるいは詩にうたうものとはみなされなかったのである。中唐蛮夷の文学の始まりともいうべき韓愈は、陽山の地で覚えた周囲への嫌悪とおびえをひたすら書き記す。人の言葉とはおもえぬ言葉をしゃべる人々、危害の恐れのある動物や虫に満ちた風土――そこには違和感の表白しかうかがえないものの、そういうかたちであれ、南方の地の実態に対する注視が韓愈から始まると、論者は位置づける。続いて柳宗元の場合、最初の貶謫の地、永州では書翰のなかでその地への嫌悪を記していたのが、柳州に移ると詩のなかにもそれがうたわれること、しかし彼の文学を代表する永州の山水詩、山水記では中原とは異なる独特の美を見付け、表現するというように、韓愈の単純な嫌悪とは異なる、やや複雑な様相を見せる。さらに元稹・白居易に至ると、基底にあるのは異土に対する違和感であるにしても、その地の風俗、習慣、行事などを子細に観察し描写する傾向が現れ、ふんだ

んに「自注」を織り交ぜて説明するという報告の様相を呈するに至る。最後に劉禹錫になると、もはや嫌悪の情はまったく消失し、その地の民謡に倣った歌を作るなど、うとましいものとして拒絶するどころか同化しようとする態度が見られる。嫌悪、拒絶から始まって、積極的な関心を抱く態度に進み、さらには同化しようとするかに親近感を覚えるに至るというように、中唐の五人の間でこのように展開していく「蛮夷」の受け止め方の変転は、やがて宋代、蘇軾に見られるように中原とは異なるもう一つの文化として認識するに至る。中唐の文人における南方の捉え方の変化をこのように分析した本論は、中唐の文学が従来の枠組みを大きく変え、日常の身近な現実も文学のなかに取り込まれていく変貌の一つを明らかにしたものである。

さらに望むらくは、その先駆ともいうべき杜甫はどうであったか、中唐の五人以外の文人ではいかに捉えられたか、考察がほしい。宋代の例として言及される蘇軾についてもさらなる論述が必要であろう。処々に目を引かれる指摘が見えるが、それが指摘だけに終わって考察が深められない点も惜しまれる。たとえば元稹の「蛮夷」観の変化は自分を見る見方にも変化を及ぼしたと論者はいうが、この興味深い指摘は具体的にどのような自己認識の変化を生じたのか、ぜひ知りたくなるところである。こうした問題は論者が今後さらに研究を深化していくべき課題であり、様々な問題に拡がっていくであろうことも、本論のテーマの重要さをしめしている。少なくとも本論が扱う範囲においては、中唐五大家それぞれの差異と展開を鮮やかに掘り出した好論文ではある。

以上、審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、２００９年２月２４日、調査委員３名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。